

設案 寛, 1979: 冬季の日本海上における雲分布,
東北地理, 31, 87-94.
内田英治, 1979: V字型雲パタンと日本海沿岸の大
雪, 天気, 26, 287-298.
——, 1982: V字型雲パタンと日本海沿岸の大

雪(Ⅱ), 天気, 29, 43-52.
植村八郎, 1980: 冬季節風下の日本海沿岸に大雪
をもたらすじょう乱の構造と形成について, 天
気, 27, 33-44.



立平良三 著
第 II 期
気象学のプロムナード 2

新しい天気予報
—確率予報とナウキャスト—

A 5 版 東京堂出版 (1986)
186頁, 3,500円

確率予報業務が本格的にスタートしてから既に4年経ち、一般の利用者に十分定着したように思える。いくつかの世論調査からもほとんど違和感なく受け入れられたことが分かる。まさに、『新しい天気予報』が根付いたとの感がある。

降水確率予報で発表される確率値については、試行段階から内外で様々な議論が交わされてきた。予測対象があいまいであるとか、予報された確率値は検証可能なのか、最終的な判断を利用者に委ねるのは、予報官の怠慢ではないのか等など。さらに、確率予報を支える技術として有効な MOS については、『考えない予報官をつくってしまう (meteorological cancer)』といった批判も根強く残っている。そのようないくつかの議論や、気象庁予報課内で着々と進められた技術開発に伴ってその都度変更された様々なアウトプットに、地方の現場でもスムーズに対応出来なかった時期があったということも耳にした。新しい技術開発に伴うあつれきの一つであったと思う。これらの一連の技術開発に伴う成果は、昭和61年2月に作成された「予報技術資料第35号」・『短期予報用ガイダンスの解説』(気象庁予報部)によって部内に解説され、活用が図られている。本書はまさにその一般への普及版ともいえる性格を持っており、確率予報の成り立ち、精度の評価、利用法が手際良く解説されている。

降水確率が50%の時はどう判断したらよいか、50%予報は予報官の無責任をさらけ出しているのではないのか、等とよく言われる。これに対し気候的確率(普通10~30%位)に比べて雨の降る可能性がずっと高まっている状態であるとの説明を加えている。世論調査でも傘

を持って出かける目安として、30%位に一つのピークがあり、このような説明でかなり納得してもらえ。本書で、著者は予報と実況のデータを散布図に示して(図5.5),『降水確率予報50%は、降るかどうか五分五分だが、降るとしたら県内全域と予想される場合に発表されると推定できる。このケースを調査して「100%」と「0%」へ振り分けられれば、成績向上につながるが実際は容易でない』と、50%予報の性格を明快に意味付けている。本書には付録として、1985年9月後半の16日間の降水確率の予報値と降水の実況値を予報天気図と実際の天気図とを並べて掲載している。この付録を見て、予報の精度の評価に使われるブライアースコアの数値よりもずっと身近に精度を実感できた。惜しむらくは、各事例について示した解説が、図と切り離されているため、いちいちページを繰って見なければならなかったことで、図をわずかに小さくするだけで解説を同じページに入れられたらと思う残念であった。

本書のもう一つのテーマであるナウキャストについては、まさにレーダー観測から計算機を用いた予測手法まで幅広い分野に精通している著者ならではの記述が随所にみられた。今日的課題であるナウキャストを有効なものにするには、開発主体である気象庁と、情報の受け手である社会、それら双方を結ぶ報道機関の三者が有機的に結び付く必要がある。

ところで、気象を学ぼうと志す学生は、ともすると社会の動きに無関心になりがちで、その傾向は筆者にも多分にある。本書の2つのテーマは何れも、著者が社会の要求を素早く感知し、その実現に尽くしてきたテーマであり、社会の欲するところに応える製品(予報)を世に送り出そうとしてきた著者らの熱意が本書を支えている。そこに、社会の動きに鈍感な者に対して、現在の、さらに今後の方向付けを明確に示すものがあると感じた。その様な意味から、本書のタイトルに若干の不満を感じている。蛇足ながら付け加えると、タイトルにことさら『新しい……』とする必要はないように思える。副題をそのまま本題とした方がよかったと思う。10年後にも新しさを失わない著者の生きざまがそこにあるから。

(気象大学校 安富裕二)